

脇坂 美和子
(京都大学大学院)

wakizaka.miwako.32v@st.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

滋賀県湖北方言（以下湖北方言）は琵琶湖の北東部、現在の行政区域では長浜市と米原市にあたる地域で話されている方言である。この方言には人や物の存在を表す動詞にイル・ヤアル・ヤンス・オル・ヨオル・アルの6種類の区別があり、それぞれを起源として文法化したと考えられる形式のアスペクト・待遇性などの範疇を示す接尾辞（以下アスペクト接辞）が存在する。本発表では、この方言の述語形式の記述に不可欠でありながら、先行研究（井之口 1952、笥 1962 など）においてはほとんど注目されてこなかった存在動詞と、これに対応する接尾辞について詳細な記述と分析を行う。人称、アスペクト、待遇性などの異なる範疇がこの方言の述語形式にどのように標示されるかを記述した上で、そのふるまいから名詞句階層 (Silverstein 1976) がこの方言の存在動詞とアスペクト接辞の選択に大きく関与していることを主張する。また、これらの現象を方言類型論的な観点から検討すると、湖北方言が例えば工藤 (2014) に提示される方言類型のいずれにもあてはまらず、管見の限りではこれまでに報告されていない特性を有していることを示す。

例文は断りのない限り同方言の母語話者である発表者の内省に基づく作例である。

2. 湖北方言の6種の存在動詞

湖北方言には、存在を表す動詞に、有生物についてはイル・ヤアル・ヤンス・オル・ヨオル、無生物にはアルの合計6種類がある。これらの存在動詞は主語との間に共起制限があるため、例えば (1) のような質問に対しては、「誰が、存在する/しないのか」がわからない限り答えることができない。

(1) 「翌日、家に不在の時、「明日、家におらん」と言うことがありますか？」

(「出身地鑑定!! 方言チャート」<https://ssl.japanknowledge.jp/hougen/hougen100/check.php>)

(1) の発話の文脈が、例えば「明日誰かが宅配便を受け取れるだろうか」という質問に対する応答という状況である時、この方言での自然な発話例は次のようになる。

- | | |
|-----------------------|------------|
| (2) 明日、家に（私は）インで | 話者が不在 |
| (3) 明日、家に（おまんは）インやろ | 聞き手が不在 |
| (4) 明日、家に（大家さんは）ヤアレンで | 目上の人不在 |
| (5) 明日、家に（兄ちゃんは）ヤンセンで | 親族・友人などが不在 |
| (6) 明日、家に（子どもらは）オランで | 年少者などが不在 |

(2)～(6) に見るように、この方言の話者は存在の主体に応じて動詞を使い分ける。この使い分けに関与する要素としては、少なくとも主体の1. 有生性、2. 人称、3. 待遇性の三点が認められる。以下にこれらの文法範疇がどのように存在動詞の選択に関与するかを概観し、名詞句階層の概念によって、存在動詞とその主語になる名詞句との共起制限を統一的に説明することが可能となることを示す。

2.1 湖北方言の存在動詞と有生性

湖北方言には、主体に有生物を取る存在動詞が5つある(表1)。この5つのうち、ヤアルとヤンスは人間のみに使用する。イル・オル・ヨオルは人間または動物に使用できるが、動物には通常はオル・ヨオルが使われ、ヤアル・ヤンスの使用は非文になる。但し有生物においては、有生性のみでどの動詞を選択するかを決定することはできず、次に見るように、待遇性や人称を参照しなくてはならない。無生物にはアルを用いる。

表1. 湖北方言の存在動詞と有生性

有生物	人間のみ	ヤアル ヤンス
	人間・動物	イル オル ヨオル
無生物		アル

2.2 湖北方言の存在動詞と人称・待遇性

この方言では、有生物の存在を表す場合には、待遇性の表示が主節で義務的となる。待遇性には、先行研究(宮治 1987 ほか)でも指摘されているように、「高低」と「親疎」の二つの評価軸が観察される。それぞれの動詞が表す待遇価の「高低」を見ると、ヤアルは(7)に見るように高さを示す。

(7) 先生がヤアル *ヤンス *イル *オル *ヨオル (先生がいらっしゃる)

イル、ヤンス、は待遇価が高くはないことを示し、オル、ヨオルは低いことを示す。待遇価が高いかどうかは必ず示す必要があるが、低いかどうかは明示しなくてもよい。これは社会的に、目上の人に敬意を欠くのは失礼に当たるが、目下の人には必ずしもそれを示す必要がないという通念とも合致している。但し、(8)に見るように、待遇価が「高くない」のみではほぼニュートラルなイルは、通常の文脈では3人称の主節には使いにくい。

(8) 弟がヤンス/オル/ヨオル ?イル *ヤアル (弟がいる)

オルとヨオルは乱暴な言葉とみなされる傾向があり、使用にはジェンダー差が観察される。発表者の内省と観察では、女性は年少者や動物についてのみこれを用いるが、男性は家族や友人などにも用いることが多い。

「親疎」の評価軸については、ヤンスが「親」を標示し、それ以外は親疎のいずれにも使用することができる。従って(9)のように親しい友人や幼児などであればヤンスを使えるが、(10)のように見知らぬ人にヤンスを使うことはできない。かつ、有生性と待遇価の高低の制約があるので、親しみがあっても目上の人や人間ではないペットの犬などには使用できない。

(9) 友達が/子どもがヤンス

(10) *知らん人が/*先生が/*隣のポチ(犬)がヤンス

表2 湖北方言の有生物の存在動詞と人称・待遇価

存在動詞	待遇価			人称		
	高	低	親	1	2	3
ヤアル	+	—	±	×	○	○
ヤンス	—	±	+	×	△	○
イル	—	±	±	○	○	△
オル	—	+	±	×	△	○
ヨオル	—	+	±	×	×	○

表2に有生物の存在動詞が標示する待遇価とそれぞれの動詞が主語に取りうる人称を示す。待遇価の高さ、低さ、親しみについて、標示される場合は+または—で示し、±は無指定を表す。人称については通常使用される形式は○、特定のムードや文脈でのみ現れる形式は△、現れないものは×で表している。但し、共通語など他の日本語方言と同様に、湖北方言においても主語は明示されることが多く、三人称代名詞が使用されることは稀であるため、ここでは人称代名詞に限らず、文脈などによって同定できる存在の主体を分析の対象としている。

待遇性と人称との関連を見ると、まず一人称については、待遇性に関しては最もニュートラルに近く「高低」の点で「高くない」ことのみを示すイルが専ら用いられ、待遇価が低いことをはっきりと標示する

オル・ヨオルが用いられることはない。二人称については、イル、ヤアルが使用される。オル、ヤンスは命令形式の場合のみ (11)、(12) のように使用できる。ヨオルには命令形式が存在しない。

(11) ここにヤンセ / オレ (ここにいなさい)

(12) こんなとこにヤンスな / オルな (こんな所にいるな)

三人称には、有生物の存在動詞が全て使用できるが、上述のとおりイルは主節には用いられにくい。湖北方言の待遇表現が、第三者待遇に偏る傾向があるという点は先行研究でも指摘されているところである(宮治 1987 ほか)。しかし、先行研究では後述するアスペクト接辞を用いた形式などについて述べられているのみで、存在動詞との関連については、発表者の知る限りでは、言及されていない。しかし、この現象は、アスペクト接辞の起源と考えられる存在動詞そのものの使い分けに見られる。また先に述べた主体の有生性とも密接に関連している。以上のような観察に基づいて、次に Silverstein (1976) の提示する名詞句の階層という観点から、湖北方言の存在動詞を検討する。

2.3 湖北方言の存在動詞と名詞句階層

Silverstein (1976) が提示した、名詞句に階層が存在し言語形式に反映されうるという名詞句階層の概念については多くの研究があり、日本語の方言記述に関しても例えば佐々木・カルヤヌ (1999) の分析などに取り入れられている。湖北方言においても、これまでに見てきた存在動詞の選択に関与する有生性、人称、待遇性という文法範疇は、それぞれ別個に機能しているのではなく、ある種の名詞句階層の上に分布していると考え、これらの異なる範疇がこの方言の述語構造に関与する状況を統一的に捉えることが可能になる。

図 1 に湖北方言の存在動詞の選択に関与する範疇を示す。矢印の実線の部分が自然な談話で聞かれる範囲で、点線は特定の文脈やムードに限り現れる範囲を表す。ここで示す階層は、上述のとおり、人称については文脈などから同定できる存在の主体を分析の対象としている。人称代名詞を他の名詞と区別しないという点で Silverstein などの分析とは大きく異なり、角田 (1991:39) の提示する分析により近いものとなった。

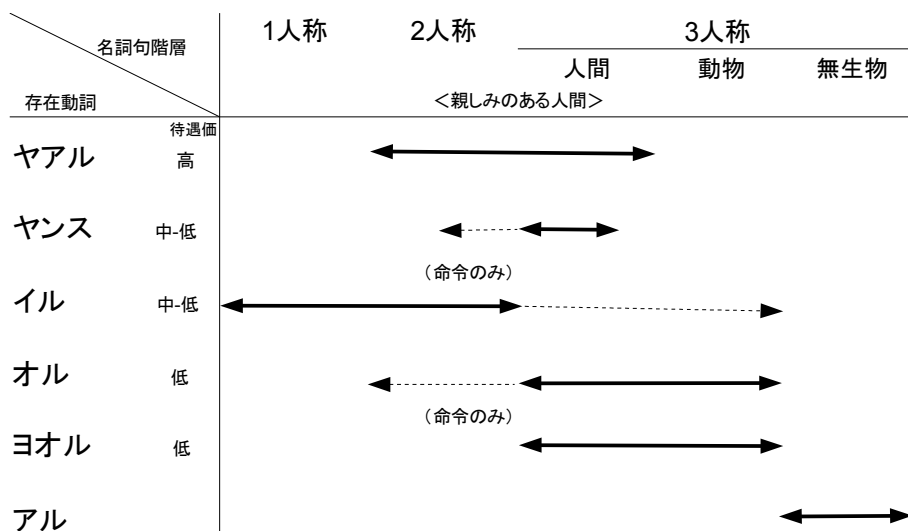


図 1. 湖北方言の存在動詞の使用範囲

前節で述べたように、待遇性の「親疎」という評価軸において唯一はっきりと「親」を示し、最も有標の形式であるヤンスは、命令形式を除けば、この階層の真ん中に当たる三人称・人間の部分のうち、親し

みのある人間にのみ使用できる。このヤンスのカバーする領域を中心にして、ヤアルは使用領域が二人称の方向と親しみが薄い人間の方向に伸びて待遇価は高くなり、オル・ヨオルは動物の方向へ伸びて待遇価は低くなる。イルについては、全ての人称について使用可能であるという点では、人間の存在動詞の中では最も無標の形態である。しかし、待遇性の表示が義務的であり、かつ第三者待遇に偏るこの方言においては、待遇性がニュートラルに近いという性質のために却って三人称では使われにくい。従って、存在動詞の無標の形式は主体の名詞句階層によって異なり、一人称、二人称ではイル、三人称の人間では待遇価に依存し、動物ではオルまたはヨオルであると考えられる。

このように、湖北方言においては、主体となる名詞句と述語形式との共起制限を、その名詞句の有生性、人称、待遇性という文法範疇の、名詞句階層上の分布という点から統一的に捉えることができる。文法範疇ごとの分布は階層の端から逆の端へ、あるいは中心から両端に向けて段階的に広がり、重なりはあっても途切れることのない連続体をなす。そもそも待遇性を表示することは、名詞句に階層を設けることにほかならず、この表示が義務的である湖北方言は、名詞句階層の考え方に親和性があるとも考えられる。また、この方言の待遇性に「高低」と「親疎」という異なる対立軸が存在することは、名詞句階層がいくつかの異なる対立軸を組み合わせたものである可能性を示唆しているとも考えられるだろう。次に、これらの存在動詞が文法化したと見られるアスペクト接辞について検討する。

3. 湖北方言のアスペクト接辞

本節では、これまでに見てきた全ての存在動詞がそれぞれ文法化したと見られるアスペクト接辞の概要を記述する。これらの接辞には、その形態と用法において、工藤 (2014) などによってこれまでに報告されてきた西日本方言や京阪方言、共通語などとの間に類似点と共に多くの相違点が見られる。

3.1 湖北方言の存在動詞とアスペクト接辞の対応

湖北方言の存在動詞と、これに対応するアスペクト接辞を表3に示す。さらにアスペクト接辞が動詞のタイプごとに表す意味を工藤 (2014:498) に倣って、主体動作動詞(歩く)、主体動作客体変化動詞(開ける)、主体変化動詞(落ちる)のそれぞれについて示した。なお、「落ちる」については連用形に促音便が現れることがある。以下にこれらのアスペクト接辞の性質を見てゆく。

表3 湖北方言の有生物の存在動詞とアスペクト接辞

存在動詞	アスペクト接辞	直前・完成相	進行相	結果・継続相
ヤアル	ー(ヤ)アル、ーテヤアル	歩かアル 開けヤアル 落ちヤアル	歩いテヤアル 開けテヤアル 落っテヤアル	開けテヤアル 落っテヤアル
ヤンス	ー(ヤ)ンス、ーテヤンス	歩かンス 開けヤンス 落ちヤンス	歩いテヤンス 開けテヤンス 落っテヤンス	開けテヤンス 落っテヤンス
イル	ーテル		歩いテル 開けテル 落っテル	開けテル 落っテル
オル / ヨオル	ートル / ーヨル	歩きヨル 開けヨル 落ちヨル	歩いトル 開けトル 落っトル	開けトル 落っトル
アル	ータル		落っタル	歩いタル 開けタル 落っタル

(a) 存在動詞とアスペクト接辞の関係をみると、前節で見た存在動詞の選択に関する有生性や人称、待遇に関わる制約は、基本的にはアスペクト接辞に引き継がれている。主体が有生物か無生物かで

アスペクト接辞は(13)、(14)のように異なる。

(13) 子どもが池に落っ-トル/-テヤンス ?-テル *-テヤアル* -タル

(14) 財布が池に落っ-タル *-トル *-テル *-テヤンス *-テヤアル

イル、アルに対応する形式の直前・完成相は、動詞の終止形が担う。これは、終止形と同様に待遇価がニュートラルに近い(但し、高くないことは示す)存在動詞イルの使用範囲が一人称、二人称に偏ることと対応している。イル、アル以外の動詞に対応するアスペクト形式は、待遇価の高低や親しみのニュアンスを明示するため、終止形で直前・完成相の表示を代替することはできない。

有生物では進行相と結果・継続相を区別しない。無生物では、結果・継続相は客体の状態を表す。行為の主体が有生物で客体が無生物の場合、結果・継続相では、主体については行為が継続し、客体については結果が継続していることになる。従ってこの点に関しては、共通語のテアル形と同様に、アスペクト形式がボイスと関連している。(15)に見るように、行為の主体を主語にしてアスペクト接辞の-タルが進行相を表すことはできない。

(15) 私が店を開けテルで店が開けタルで *私が店を開けタル
私が店を開けているので店が開けてあるよ

但し、例えば名簿に友達の名前が抜けていた時や新聞に恩師が載っていた時、(16)、(17)のように

(16) あいつが抜けタル (あいつが抜けている)

(17) 先生が載っタルで (先生が載っているよ)

などということはある。この場合抜けている「あいつ」や載っている「先生」は一種のメトニミーで、直接の指示対象は「あいつの名前」や「先生の記事」などの無生物と考えられる。

アスペクト接辞では、オルが文法化したと見られる-トルと、ヨオルが文法化したと見られる-ヨルについては、無生物の主語との共起も許容される余地がある。これについては、無生物の中で擬人化できるような物については、生物主語相当として扱えると考えられる。(18)では、通常は先行詞に無生物をとりにくい「自分」が機械を指すことも、擬人化が起こっている傍証であると考えられる。

(18) (機械が味噌を)自分で押して、押し出してくヨンにやから。

(機械が味噌を)自分で押して、押し出してくるのだから。

(2016年8月に長浜市内で89歳の男性より収録した談話資料による)

(b) 存在動詞においては、オルとヨオルは、オルに命令形があり、これを二人称に使用できるという点のみが異なっていたが、アスペクト接辞では-トルと、-ヨルが役割分担する形で相補分布を示し、(19)、(20)に見るように、-ヨルが直前・完成相を、-トルが進行相と結果・継続相を担う。この点については、工藤(2014)などで西日本型に分類される、同様の形式を持つ方言とは大きく異なっている。

(19) 今、鳥が飛びヨル (今、鳥がこれから飛び立とうとしている)

(20) 今、鳥が飛んどル (今、鳥が空を飛んでいる)

さらに、-ヨル、-トルは次のような形でアスペクト的な対立を示すと共に、エビデンスシャリティーを標示する。

- (21) 隣の犬が死にヨル。(隣の犬がもうすぐ死ぬ)
 (22) 隣の犬が死んだル。(隣の犬が死んでいる)

(22)では犬の死体を見ているというのが普通の解釈である。過去形は次のようになる。

- (23) 隣の犬が死にヨッタ。(隣の犬が死んだ)
 (24) 隣の犬が死んだッタ。(隣の犬が死んでいた)

(23) では、死んだという事実に言及しているのみであるが、(24) では「死ぬところは見えていないが死体は見た」というのが普通の解釈であり、死ぬ瞬間には立ち会っていないことを含意する。換言すれば、死ぬ瞬間の点までと、行為の全体像をーヨルが表し、死ぬ瞬間を含まない結果の継続をートルが表している。

(c) -ヤアル、-ヤンスについては、連用形+テ形に後続する形式が進行相を示し、動詞語幹に直接後続する場合は直前・完成相を示す。この動詞語幹への接続は動詞の活用類によって異なり、変格活用のみが (25) のように連用形に接続し、それ以外の動詞は (26) のように未然形に接続する。

- (25) 先生が来(き)ヤアル、来てヤアル (先生が来られる、来ていらっしゃる)
 (26) 先生が行かアル、行ってヤアル (先生が行かれる、行っていらっしゃる)

(d) 6種類のアスペクト接辞は全てが死ぬ、腐る、流れるなどほぼ全ての動詞に後続できる。無生物でも比喩的に「ハードディスクが死んだル」などはいえる。そのため「ほとんどすべての動詞にあって、文法化が最も進んでいるもの」(工藤 2014: 474)を中心的アスペクト形式とする定義に拠って、どれが中心的かを定めることはできない。いくつもの形式が相補う機能を持って並存しているとすべきであろう。

結論と今後の課題

本発表では、滋賀県湖北方言の6種の存在動詞とそれぞれから文法化したと見られるアスペクト接辞を概観し、その選択には、一種の名詞句階層が関与していることを示した。これによって一見ばらばらに機能しているように見える文法範疇のふるまいを統一的に記述することが可能となった。

また、アスペクト接辞に関しては、工藤 (2014) などによる方言類型にあてはまらない現象を提示し、この分野に新たに貢献しうる未記述の方言の可能性を示した。今後、自然談話テキストに現れる例も本発表で示した分析で説明できる見通しである。このことは、この方言が北陸、中部地方との接触地点にあることや、既に指摘されているように、アクセントが混在している事実と無関係とは考えられない。湖北方言の全体像について記述を進めるとともに、方言接触などについても考察を進めてゆきたい。

参考文献

- 井之口有一 (1952)『滋賀県言語の調査と対策: 方言調査編』彦根: 井之口有一 (私家版).
 寛大城 (1962)「滋賀県方言」榎垣実(編)『近畿方言の総合的研究: 159-217. 東京: 三省堂.
 工藤真由美 (2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』東京: ひつじ書房.
 角田太作 (1991)『世界の言語と日本語』東京: くろしお出版.
 佐々木冠・ダニエラ,カルヤヌ (1999)「水海道方言の4つの斜格」『一般言語学論叢』2: 5-40.
 宮治弘明 (1987)「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151: 38-57.
 Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In: R.M.W. Dixon (ed.) Grammatical categories in Australian languages, 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.